

‘made’への遠い道

——ことばは崩れる——英語の語源と由来

菅 沼 惇

目 次

1. 想像してみたい
2. 中学生の珍答
3. 原点—OE期での例
4. 過程—ME期での例
5. 到達点
6. 鳥瞰図

1. 想像してみたい

現代英語で make という動詞は make-made-made と三要素形の活用変化をする。ただこれは一寸面白いもので、made の語中に makede というように k 文字又は k 音を空想してみようと思う奇特な人がひょっとしたらいるかもしれない—そういう人を何と云うのだろうか？ 言語学的空想家だろうか？ うん、空想というものは何でも良いものである。空想は空想であって空想でないことがある。空想には科学性が秘められていることがある。

2. 中学生の珍答

ところが日本の中学生がこれをするのである。中学生は make-made-maked-maked (meiku-meikudo-meikudo) とやるのである。そして先生から「えっ!? 何ていうことだ! お前はそんなことも知らないのか! make-made-made じゃないか!」と叱られることになるのである。

当然叱られなければならないが、そのまた反面「君は言語学的隠れたる才能があるよ。」と一寸だけ褒めてやってもよい。本当に「君は頭が良いよ！」と言ってやってもよいが、ほんとに頭が良いのでもないかもしれない。そこはまた二つに分かれる所かしかないが、即ち本当に頭が良ければmake-made-madeを知っていなければならない。ところがそう答えなくてmake-maked-makedと答えたのであるから、幾ら頭が良くたって2番目?位の頭だろうからである。ここで頭の良さに二通りあることになる。所謂二通りなのである。即ち前者は記憶力が強いという頭の良さであり、後者は応用力があるという良さである。この種の中学生、ところが、大抵は勉強的惰性上この種の答えを出していることが多い。またところがその惰性的回答も実は人間の言語能力の素晴らしい一面を如実に覗き見させていたことにもなる!

更にまた、この中学生の誤答・珍答なるものまた別の意味において素晴らしいものでもあるのだ。素人が時として名人域のことを偶然しでかすことがあったりする——あれである。実はこれ昔々の英国人の英語を偶然突いていたことになる。

3. 原点—O E期での例

それでは古期英語での事情はどうであったかを垣間見よう。

その頃 make のことを macian (mákian) と言っていた。ドイツ語の machen (máxən) を髣髴とさせる言葉である。例えば次の様に使われた。

(1) ic macige ðe mycelre mægðe *Gen. XII*₂

(= And I will make thee a great nation)

そして過去・過去分詞形は次の通りであった。

(2) Ða...³⁾ undyde Noe his eahðyrl, ðe he on ðam arce gemacode. *Gen.*

*VIII*₆

注 1) 生得的言語習得説においては, goed, falled と幼児がやるのを創造性の一面として重視する。

2) 以下下線は特に断らない限り著者による便直上の印である。

3) 以下点線は特に断らない限り著者による文中一部省略を意味する便直上の印である。

(=Then...undid Noah its window, that he had made on the ark.)

(3) ge habbað... $\bar{\Gamma}$ gemacod þæt hy willað us...ofslean. *Exod.* V-₂₁

(ye have...and done so that they will kill us...)

即ち古期英語では、纏めてみると、次のようになっていたことになる。

(4) macian-macode-macod

4. 過程—ME期での例

それが段々中期英語の時代になると語形の単純化と文字の交代 c \rightarrow k (これはフランス語綴りの導入と言われている) が起こり、次の様になっていく。

(5) $\left. \begin{array}{l} \text{makien} \\ \text{maken} \\ \text{make} \end{array} \right\} \text{-makede-maked}$

次の例の様なものである。

(6) for he dide god iustise $\bar{\Gamma}$ makede pais. *The Anglo-Saxon Chronicle*, MCXI.

(=for he did good justice and made peace.)

(7) þæt minstre hi makeden. *The Anglo-Saxon Chronicle* MCLIV.

(=that monastry they made.)

(8) And therefore wol I maken you disport, *The Prologue*, l. 775.

(=And therefore I will make you sport.)

(9) He wayted after no pompe and reverence,

Ne maked him a spyced conscience, *The Prologue*, ll. 525-6

(= He longed for no pomp or reverence,

No made himself too much a conscience.)

やはりこうやって色々な時代の書き物の中を散策していると色々な見付け物をする。中学生の珍物がこのようにして大著、*Anglo-Saxon Chronicle* や Chaucer の作品の中にも落ちていた。

そしてそれからの道は、この maked{ma : kəd} の k が消えていかななくてはならない道である。段々と使われて行っている中に擦り減りし易い箇所は擦り

減っていったのであろう。ME期は英語の変化の中でも中々大変な時期であった。遂いに *made* [ma : də] 及び過去分詞の方は *mad*, *maad* 共に [ma : d] となつていった。次の様な例である。

- (10) God made of nou3t heuene and erthe. *Gen.* I -₁ (Wycliffe 訳後版)
(= God made of nothing heaven and earth)
- (11) God seide, Li3t be maad, and li3t was maad. *Gen.* I -₄ (同上)
(= God said, "May light be made!," and light was made.)

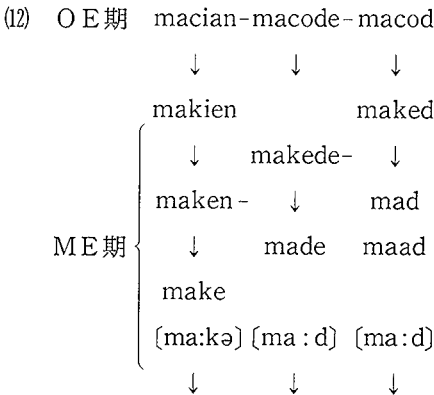
5. 到達点

そしてこれは更に、大母音推移 (Great Vowel Shift) という発音上の変化がおきて、現代英語期に入る頃には [ma : də] → [meid], [ma : d] → [meid] となつて今日に至っているのである。

「ことば」というものはこのように崩れて行くものである。丁度それは「人性」の儂く、気だるい「惰性」に、人間の諸現象のあちこちに顔を出す素朴で実直な現象がそれとなく複合しあつて醸し出されるえも言われぬ言語現象なのである。

6. 鳥瞰図

終わりに此処までのこの語の変遷を特徴的に鳥瞰図にしてみると次のようになる。



ModE 期 make - made - made

引用書目

1. *The Old English Version of The Heptateuch*, ed. by Crawford, S. J., 1922.
2. *The Anglo-Saxon Chronicle*, Vol. 1 by Thorpe, B., London, 1861
3. *THE HOLY BIBLE made from The Latin Vulgate by J. Wycliffe & His Followers*, ed. by Forshall, J. & Madden, F., OUP, 1982.
4. *THE PROLOGUE, THE CANTERBURY TALES* by G. Chaucer ed. by Skeat, W. W., Oxford; Clarendon Press, 1963.